

第6回 放射線管理士セミナーを受講して

山梨県厚生連健康管理センター放射線科 廣瀬 準司

2014年11月1日(土)に山梨県甲府市の山梨県立中央病院にて開催された第6回 放射線管理士セミナーを受講いたしましたので、参加しての感想を寄せさせていただきます。

まずは神奈川県放射線管理士部会、皆様の情熱とパワーに感動いたしました。活発な質問やディスカッションなど、圧倒される程の活気を感じました。原子力災害、医療被曝に対する知識や意識が非常に高く、背筋の伸びる想いで受講となりました。

佐藤洋一先生、諸澄邦彦先生の原子力事故を踏まえたお話は、国民から見た診療放射線技師の立ち位置を考えながら拝聴していました。特に諸澄先生のお話から、「原発事故による公衆被曝と私たち診療放射線技師の範疇である医療被曝は、コントロール出来ているか否かの視点から全く別物である」ことを再認識しました。

私自身、診療放射線技師であることから、日常で福島第一原子力発電所事故についての質問を受けることがあります。私はそのつど丁寧に向き合い安心していただけるまでお話するのですが、不安を取り除くことが困難な場面もあり、悩んだことがあります。私達は「診療放射線技師」であり「原発事故による被曝」については、トレーニングされた専門家が回答し、そちらで事故解説をし、国民の不安に応えるべきだ、と考えたこともありました。しかし、これは国民目線でないことを諸澄先生のお話から再認識し、深く反省すると共に恥ずかしさをも感じました。国民からすれば「診療放射線技師」であろうが、「原子力従事者」であろうが、同じ「放射線を扱う技師」として、ひとくくりです。つまり、私達「診療放射線技師」は原子力の事故に関する説明、不安解消など、国民の心と向き合うことが求められており、そうであるべきだと強く感じました。

しかしながら「原発事故よりも何よりも、そもそも今自分が患者や受診者に照射した放射線の線量がキチンと言えない診療放射線技師（スイッチマン）がいることが大問題」とのコメントにもハッとしました。これには私も賛同いたします。私自身が勉強不足であること、自施設の技師がこのような状況であることにまず、責任を感じました。更に診療放射線技師にスイッチマンが存在することを恥ずかしく感じ、責任も感じました。まずは自分から、まずは自施設から改善しよう！！強く決意した時間となりました。

今回私どもの施設から、多くの若い技師が参加させて頂きました。今日の話も拝聴し、皆で意識の高まりを確認しました。これから施設一丸となって勉強し、国民の皆様のお役に立ちたい、そう感じた貴重な時間でした。山梨県診療放射線技師会、山梨県診療放射線技師会放射線管理士部会、そして神奈川県放射線管理士部会のコラボレーションは大成功に終わったと言えるでしょう。企画運営に携わったスタッフの方々、本当にお疲れ様でした。今後とも、この素晴らしい同講習会が各地で広く開催されることを期待いたします。



実習の様子